

●現代京都の明暗

「大京都」／戦時下の京都

戦後の混乱と新生

都市生活の変容

●京都と現在



●はやしや・たつさぶろう

一九二四年金沢市生まれ。

京都大学文学部国史専攻卒業。

現在、京都大学人文科学研究所所長。

文学博士。主な著書に、

『古典文化の創造』—東大出版会、

『中世芸能史の研究』、『京都』、

『歌舞伎以前』—岩波書店、『日本文化の

東と西』—講談社現代新書—など。



●かとう・ひでとし

一九三〇年東京生まれ。

東京商科大学卒業。

スタンフォード大、アイオワ州立大、

京大人文研などで教職を歴任。

現在、学習院大学法学部教授。

主な著書に、『人間関係』、『アメリカの

思想』、『見世物からテレビへ』、

『アメリカ人』—講談社現代新書—など。

381 古都の近代百年

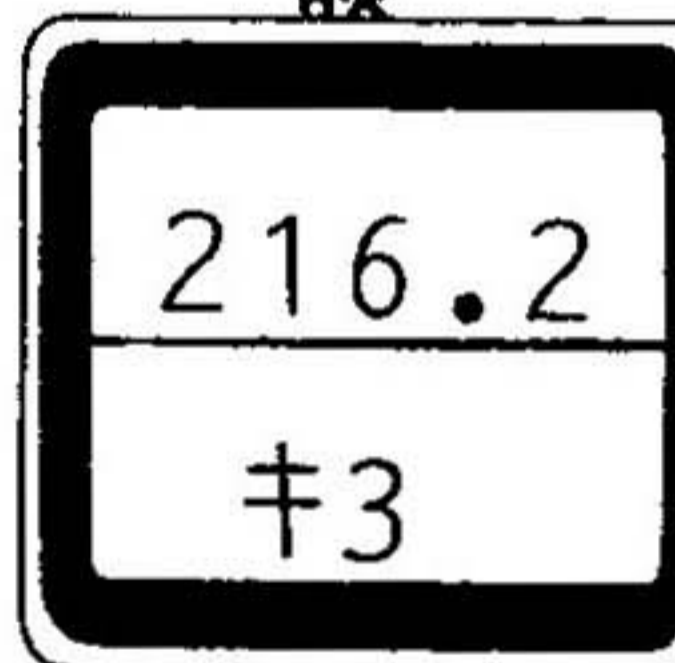
—京都庶民生活史の



林屋辰三郎  
加藤秀俊

十CD一編

講談



370

0221-157810-2253(0)



381 講談社現代新書

京都庶民生活史 ③

# 古都の近代百年

維新による遷都は、京都を衰微させることなく

むしろ、琵琶湖疏水をはじめとする復興と

新生への息吹に燃えたたせ、

古都のすみずみに近代の血をめぐらせた。

いにしえびとの魂が遊行する

文化の伝統都市の現代——。そこに生きる人びとの

くらしをありありと伝える庶民生活史最終巻。



林屋辰三郎＋加藤秀俊＋CD一編

右中

23 222013

い。液体燃料確保のため松根油の増産等を企てるが、結局開発しきれぬうちに敗戦をむかえるのである。京都―大阪間の物資輸送のためふたたび往時の伏見港が脚光を浴び、伏見港改修にとりかかるのもこのころのことであった。

### 決戦体制

京都は非戦災都市といわれてきたが、けっして空襲が皆無であったわけではない。昭和二十年（一九四五）一月十六日午後十一時すぎ、東山区馬町一帯が爆撃され、三十四名の死者と四十五戸の家屋の全半壊をもたらしたのをはじめとして、市内では終戦までに六回の空襲が記録され、このほか、五月二十八日と六月二日には上京・下京・中京・左京・東山区内に「アメリカの声」「マリアナ時報」など約二十万枚の宣伝ビラがまかされている。このため、京都市でも防空対策はさしせまった課題となった。市民には半国防服を着て就寝すること、天井板は二、三枚はずして焼夷弾が落されてもすぐ除去・消火作業ができるようにすることなど、細かな指示を与える一方、昭和二十年三月には、京都市戦時災害救助本部を設置する。防空服を着用せずには外出しないよう指導して、ふだん着のまま交通機関を

利用することはできなくなった。四月には府社寺課は、東山一帯の社寺有林を横穴の坑木や防空壕の資材のため一部伐採することを認可した。市役所行政も百九十万円の子算で防空壕に移転を計画し、蹴上の都ホテル横、蛇ヶ谷の絵画専門学校横に大規模な防空壕の建設を計画した。島津製作所・寺内製作所・寿重工業・日本電池など防空法指定工場には重点的な処置がとられていく。

なかでも昭和二十年になって本格化する都市疎開―建物撤去は、小空地・消防道路等の建設を目的に、四次にわたり三百六十八カ所、七十万坪におよんだ。ちなみにこんにち、市内の幹線道路たる堀川通・御池通・五条通は、この建物疎開の際の空地を利用して戦後拡張工事がなされたものである。

また、鉄筋コンクリート製の建物の利用統制によって、これら堅牢建物は、行政指導による諸利用がはかられていくことになった。たとえば百貨店の一画は、統制会社事務所・行政事務の受付・日用品修理所などが「店開き」する光景を呈することになる。京都御所も昭和二十年六月、主要な殿舎のみを残して渡廊下・御台所など約五千平方メートルが疎開・撤去された。

このような状況では、もとより教育や文化行事は望むべくもない。昭和二十年にはあおいまつり葵祭も